沖縄県社協創立 70 周年「特別記念座談会」を見て

昨年度の第 64 回沖縄県社会福祉大会では、県社協創立 70 周年として、「特別記念座談会」が持たれました。

“沖縄の社会福祉の歴史を振り返り、これからを見据える”というテーマのもと、2 部構成で組まれたこの座談会は、沖縄県社協のホームページからオンラインでいつでも視聴することができます。後編には、沖福連の兼浜克弥氏も参加しているので、ぜひご覧いただければ幸いです。

座談会のビデオは後編だけでも 2 時間を超えるボリュームなのですが、最初ラジオがわりに「ながら聴き」をしていたら、内容が期待以上に面白くてついアタマからまたじっくり観返してしまいました。

通して視聴をして感じたこととしては、私たちはだいたいみんな相変わらず、「枠」に捕らわれているということです。これを常識とか社会通念と言い換えてもいいと思いますが、物心ついた頃から、私たちはむしろ進んでこの窮屈な枠のなかに身を押し込めていきます。

それで枠から外れることを死活問題かのように感じます。

「多様性」ということを言い続けながら、この枠が広がっている雰囲気もなければ、枠のなかがそれほど生きやすくなっている実感もありません。

枠の外には魔物が徘徊しているという噂で、それを「自分らしさ」と呼ぶ人もいれば、「自己責任」と呼ぶ人もいます。真偽不確かのまま、ともかくどうしても枠に身体が合わなくて外にはみ出している人もいます。そのつもりがないのに、気がついたら外に出てしまっている人もいます。

枠の内と外とを自由に行き来できるようになると、お互いにとって世界が広がるように思うのですが、これを実現するにはまず余白的な緩衝地帯がたくさんできることが、第一歩としては現実的かも知れません。

そのためのヒントや考えるきっかけが盛り沢山の座談会、兼浜さんの語る「福祉教育」や「ピアサポート」の話ももちろんいいし、それから私は特に沖労福・濱里正史さんの問題提起にいちいち強く共感できました。（増山）